



視点

メールを送り続けて

能登から遠く離れた、ここは、白山市。靈峰白山をのぞむ加賀平野にある。夫は、立山連峰をはるか海の向こう岸に見る冰見の出身。3,000m級の峰々が海の上に見える絶景といつも自慢している。おだやかな海にゆったりと広がる陸地。心落ち着く美しい景色。親指を下にして左手を伸ばして置いたように見える能登半島。日本の真ん中あたりに、海も、山も、平野も、そしてそこに暮らす、いろんな人々の日々の暮らしのある地。

学生時代には、夏休み、児童演劇をもって、各地の小学校公演にまわった。へたな学生の演劇だったが、観る子どもらは、話の中にとけこみ、狼やにわとりやその他の動物と一体化して、必死に声をかけ、応援してくれた。終わったら外へ出て走りまわり、暗くなったり海に沈む夕陽の中、いつまでも学生たちと遊んでいた。「家に帰っても、かあちゃん、ばあちゃんしかおらん！」働き手が出かせぎに出ている能登の姿だった。

教員になって数年後、障害児学校に転勤になり、夏休み中（ふだんは寄宿舎にいる）生徒達の家庭を訪問する期間があった。能登の祭りに特有の、大きなキリコを男たちがかついて、最後は海の中へ飛びこんでいく勇壮な姿に圧倒された。

しかし、その海や山や、町や村が地割れにのみこまれ、津波にのみこまれてしまった。次々、報道される記事や写真に言葉を失った。原発誘致問題でふりまわされ、大変だった土

地。なんとかくいとめて自然を守り通した土地が無残に崩れてしまった。「さっき前の海でとってきたサザエやぞ！食べてください！」とおいしく煮付けてくださったサザエ。今もその味は忘れない。聞き覚えのある地名がTVから流れ、ふとニュースを見ると「畑の中に土が盛り上がって、大きな段差ができてしまっている！ああ、教え子の今住んでいる町だ！」言葉もない。彼女からの手紙が届いた。「やっと郵便局が動いて手紙が届くようになってくれた！」と、喜んで開けてみると…。なんと！「こちらへ用事で来てくれた金沢の知人に投函してほしいと頼んで、運んでもらった」と…。なんという奇遇か！運んでくれた彼は、次に転勤した学校の教え子だった。彼が金沢へ戻って投函してくれていた。ニュースを見、新聞を読み、オロオロするばかりで、何もしてあげられず、今はメールで声かけすることしかできないもどかしさをかかえながら、それでも「私はここにいて、応援しているよ、見守っているよ」と伝え続けるしかないと、メールを送り続けている。

中谷佳子（性教協石川支部）

